

力ずくの辺野古「海底調査」

8月14日、米軍普天間飛行場(沖縄県宜野湾市)の名護市辺野古への移設計画で、防衛省(沖縄防衛局)や海上保安庁は、埋立地域周辺で海底掘削(ボーリング)調査に向けたブイの設置を始めた。海上保安庁の巡視船が作業現場を取り囲むように配置して、強引に作業を進めた。安倍政権のもとの力ずくの権力行使である。

朝日夕刊が報じた写真のように、抗議のため辺野古沖にこぎ出したカヌー(手前)と行く手を阻む海上保安庁のゴムボートの緊迫した「にらみ合い」が続く。陸上でも、キャンプ・シュワブのゲート前には多数の住民が集まり、警察官らと激しくもみあった。「新基地建設反対」のプラカードが示すように、米軍キャンプ・シュワブの海側に、新たに広大な新基地が造成される。埋立面積は160ヘクタール、全体の面積205ヘクタールであり、1800メートルのV字形滑走路を2本造る計画だ。



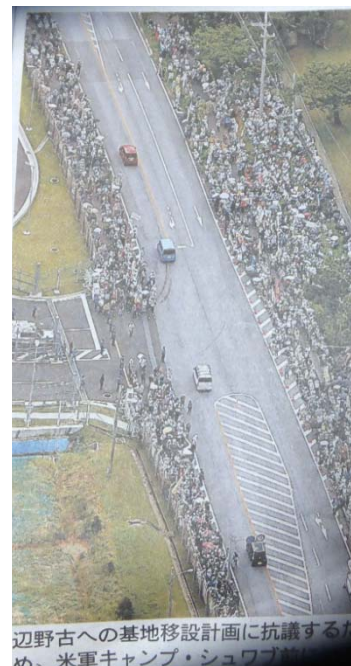
24日には辺野古移設に反対する抗議集会が、米軍キャンプ・シュワブのゲート前であった。沖縄各地からバスを連ねて集まった約3600人が周辺の歩道を数百メートルにわたって埋め、「新基地反対」と抗議の声をあげた(下の写真を含めて朝日新聞24日)。



社説でも紹介するように、集会で稲嶺名護市長は「この海に海保の船がびっしりと浮いている様子は、69年前、沖縄を占領するために軍艦が取り囲んだ光景と同じ」と指摘する。実際に「海から艦砲射撃を受けた沖縄戦を思い出す」と話す年配者もいるという。その心情、沖縄の心を政府は想像してみるべきだ。

最近の調査では、県民の8割が移設作業を中止すべきと答えている。なぜ、ここまで強権的に作業を強行するのか。11月の県知事選までに「既成事実」をつくり、選挙の争点から外す狙いというが、逆効果であることは明らかだ。

最近、田尻宗昭『海と乱開発』岩波新書、1983年を再読した。海上保安庁で勤務し、四日市などで公害を鋭く摘発する田尻宗昭さんの情熱あふれる「戦いの書」である。今、辺野古の海で住民に「過剰な警備」をする海上保安庁と、田尻さんの活動とのあまりの落差に心が痛む。



辺野古への基地移設計画に抗議するため、米軍キャンプ・シュワブ

(2014年8月31日)